

3月11日深夜、被災市町村へ派遣を指示

「おい、行ける市町村、ぜんぶおくぞ」

仙台市の国土交通省東北地方整備局災害対策本部。

川嶋直樹企画部長が池口正晃企画調整官に言ったのは、道路が繋がっている被災市町村にリエゾン（災害対策現地情報連絡員^{*}）を送り込むということだった。

3月12日未明、池口は被災した出先事務所の所長に電話をかけた。

被害が大きく、かつ到達できそうな市町村はどこか。地図を広げて、道路の被災状況を聞き、国道がダメなら迂回する県道の情報も分かる限り聞いた。九つの市町村をピックアップした。次に、それらの市町村と、被災していない日本海側や内陸の出先事務所を線で結んだ。二時間ほどできあがると、それらの事務所に片っ端から電話をかけた。

「〇〇市に行ってください。リエゾンは二十四時間勤務だから交代要員も考えて、派遣してください。期間はいつまでか分かりませんが、ローテーションもそちらにお任せします。通信機器は持って行ってください。物資も燃料も自前で調達してください。明日にでも行ってほしい」

池口は無茶苦茶なオーダーだと自覚しながら、八つの事務所に九市町村へのリエゾン派遣を指示した。

翌日も翌々日も、道路啓開^{※2}の進捗にあわせて派遣先を増やし、発災後三日で、原発の警戒区域を除く、被災十四市町村にリエゾンが入った。

そして、3月21日からは全国の地方整備局（以下、地整局）の応援を得て、リエゾン派遣は三十一箇所（四県庁二十七市町村）に拡大していった。

※1 リエゾン（災害対策現地情報連絡員）

フランス語で「つなぐ」、「連絡将校」の意味で、被災した自治体からの情報を待つのではなく、現地ですばやく情報を獲得するために、必要な期間だけ自治体に常駐する。災害が発生すると都道府県や市町村の災害対策本部に国交省職員が詰めるのは以前から行われているが、リエゾンの名称が使われたのは平成20年の岩手宮城内陸地震から。東日本大震災では、リエゾンはTEC—FORCE隊の自治体支援班と位置づけ、技術的支援や多様な調整も行った。

※2 道路啓開

緊急車両などが通れるように一車線を最優先で確保すること。迂回路も含めてがれき等を処理し、段差があれば簡易な応急処理で救援ルートを開ける。

「いいと思ったことは何でもやれ」大島大臣が徳山局長に全権委任

国交省本省では、東日本大震災の発災直後から緊急災害対策本部会議^{※3}（以下、緊对本部会議）がはじまり、大島章宏大臣は「とにかく人命救助を第一に！」と指示していた。

発災当日の22時、第四回緊对本部会議の冒頭、テレビ会議で参加した東北地整局長の徳山日出男は、大島章宏国土交通大臣に被災地の状況を伝え、意見を具申して指示を仰いだ。

「阪神大震災とは違う津波型の大震災を想定しなければならないこと、12日朝から人命救助で自衛隊や救援チームが入るルートを最優先に啓開すること、壊滅的な被害を受けた自治体の支援が必要と考えます」

これに対して大島大臣は、現場の裁量でやるよう指示した。

「とにかく人命救助を第一に！現地のごことは君にしか分からないんだから、局長は政府代表のつもりで、いいと思ったことを全部やって欲しい。あとの責任は持つ」

大島大臣は、責任は自分が取るとして、現場の司令官・徳山に全権委任したのだ。

徳山はこの会議の後、災害時のコントロールタワー・災害対策室^{※4}（以下、災対室）にいる百人近い職員にマイクで指示した。

「明朝から人命救助と救援のためのルートを確認するために、そこへ向かう道をも『啓開』によつて開ける。徹夜でその準備を行つて欲しい。明日から勝負だ」

徳山はさらに三つのポイントを示した。

- ①ヘリの視察箇所を絞る。
- ②救援ルートをどうひらくか。業者の手配を早く。
- ③自治体に、判断出来るレベルの職員を派遣する応援体制の確立。

この③が、かつてない大きな役割を担つたりエゾンの、かつてない規模の派遣となつた。

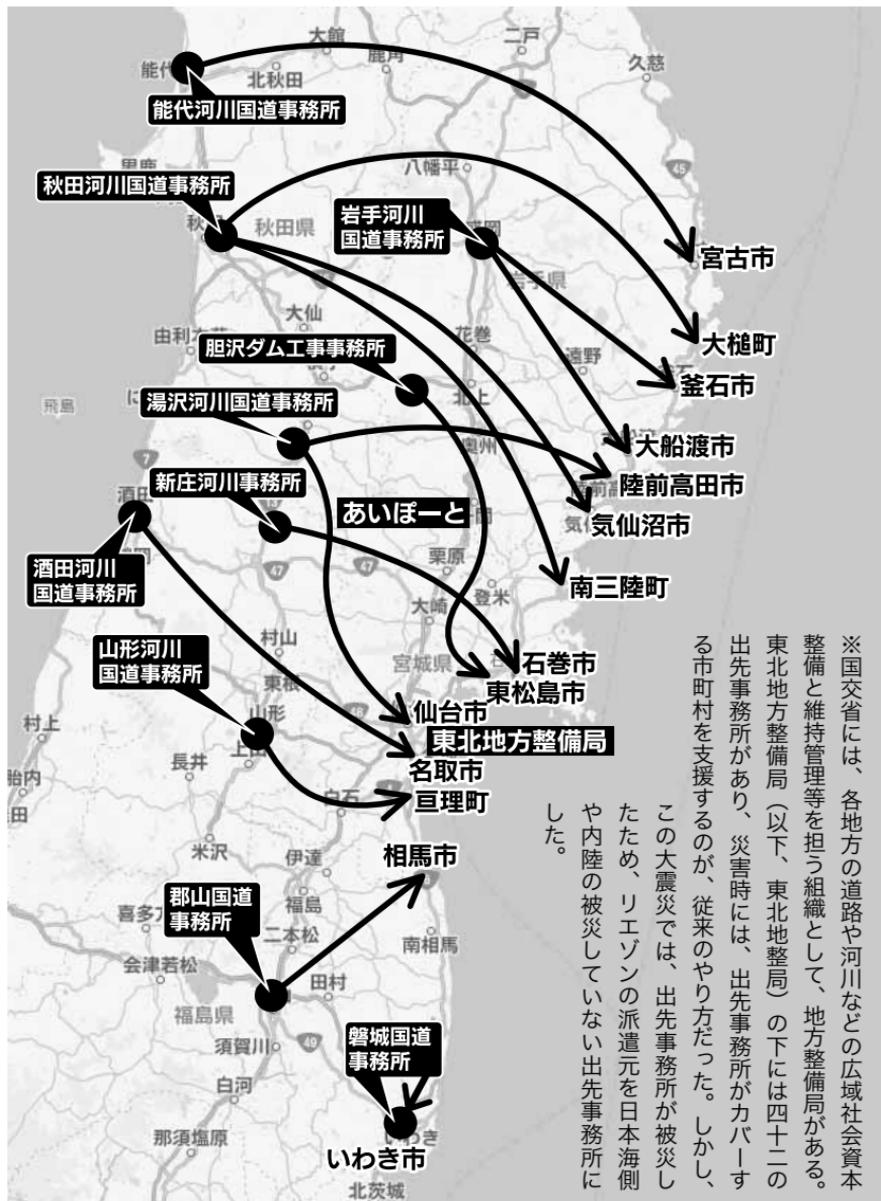
※3 緊急災害対策本部会議

法第二十八条の二により内閣総理大臣が「著しく異常かつ激甚な非常災害が発生した場合において、当該災害に係る災害応急対策を推進するため特別の必要があると認めるとき」に閣議決定により内閣府に臨時に設置する機関。各省庁でも、大臣を本部長に設置される。東日本大震災では、3月8日まで国交省緊急対策本部会議が五十回開催された。

※4 災害対策室

災害対策の中枢拠点。災害情報を総合的に把握する機能を持ち、災害対策本部会議を行う場所。国交省では、各地方整備局に災害対策室が設置されている。

当初派遣したリエゾン（県庁除く）



※国交省には、各地方の道路や河川などの広域社会資本整備と維持管理等を担う組織として、地方整備局がある。東北地方整備局（以下、東北地整局）の下には四十二の出先事務所があり、災害時には、出先事務所がカバーする市町村を支援するのが、従来のやり方だった。しかし、この大震災では、出先事務所が被災したため、リエゾンの派遣元を日本海側や内陸の被災していない出先事務所にした。

リエゾンはつらいよ 物資届かず針のむしろ

道路啓開や排水、道路の陥没応急などを「やります」、物資も「調達します」、「なんでもやります」と国交省が言うのと、困窮している市町村は「すぐに、きつちりやつてくれる」「十

分持つて来てくれる」と期待がふくらむ。「まるでウルトラマン」（胆沢ダム工事事務所・山久典）のように思われるのは無理ない。

しかし国交省とはいえ、すべてについてすぐにはできないし、十分な物量を確保できないこともある。有事のこのとき、自ら集めた大きな期待にすばやく対応できなければ、その反動は極めて大きい。それをもろに受けたのが、陸前高田市のリエゾンだった。待ち望まれていただけに、そんなときのリエゾンは最悪、針のむしろだ。

また、衛星通信車や通信機器などは「これで通信できます」と持つて行っても、地形に阻まれて機能しないこともあった。おまけに災対用機械はエンジンをかけるか、外部電源や発電機がなければ動かないし、駐車場も広いスペースが必要だ。お荷物扱いされることもあった。

「いつ届くのか」

鈴木は日々、東北地整局災対本部に問い合わせたが、ガソリン節約のため長く通話できないから、詳しい事情を聞くこともできない。鈴木が電話を切った後、「なんで早くできねえんだべ」と、怒っているのを清水川はよく見かけた。

鈴木らは市の職員に責められては、「がんばって手配していると思います」としか返事で

きなかった。「せめて、どのような調達ルートでどうなっているのか、具体的な回答をすべきだった」と反省する。

16日に電気が一部復旧し、テレビを視聴できるようになると、リエゾンはいつそうつらかった。

テレビによって、災害の全体規模や各地の被災状況のほか、他の市町村に支援物資が続々と寄せられていることも、分かる。南三陸町にはすでに毛布一万枚が届けられたと報道していた。

「南三陸町には（支援物資が）来て、なんでこっちはこねえべ」

陸前高田市には、当てにした国交省だけでなく、岩手県からも、他機関からも何も届かなかった。市民からの問い合わせや苦情は、時間が経つにつれ増大する。受け止める市職員はものすごいストレスだ。

市職員から「いつ」と聞かれると、鈴木らは素直に

市職員と打合せをするリエゾン
東北地方整備局提供



頭を下げるしかなかった。「瞬間湯沸かし器」の鈴木の頭は冷えた。

結局、鈴木と清水川のリエゾン任務中に、東北地整局の〈ヤミ屋軍団〉から陸前高田市に届いたのは仮設トイレ八基のみ。13日に依頼した燃料も、鈴木らが市の職員と相談して要請した仮庁舎用仮設プレハブも、徳山局長が戸羽市長から直接要請を受けた棺桶も燃料も、届かなかった。

とくに仮設庁舎用のプレハブは市役所機能立て直しに喫緊の物資で、戸羽市長をはじめ市職員みんなが待ち望んでいた。15日に東北地整局の〈ヤミ屋軍団〉に要請し、「17日に搬入できる」との回答に喜んだのも、つかの間。ハズレだった。

仮設庁舎用のプレハブ四棟が届いたのは19日。実は、岩手事務所が手配したものだ。プレハブがいつまでたっても届かないと困り果てた陸前高田市の職員が、18日に大船渡市役所を頼って相談した。その情報をキャッチした大船渡市リエゾンが、すぐさま派遣元の岩手事務所を報告、岩手が動いたのだ。

この報告を聞いた所長の今は、東北地整局災对本部に問い合わせたが、いつ届けられるか、分からないと言う。岩手県建設業協会一関支部に聞いてみると、即時納品可能との回答。

翌日、陸前高田市の仮庁舎が建ち上がった。そして、〈ヤミ屋軍団〉からは23日に八棟が届き、プレハブ十二棟が陸前高田市の市役所となった。

このエピソードは、リエゾンの情報収集の重要性を示す好例だ。情報は聞き漏らさない、中途半端に取捨選択せず、すべてを報告する——リエゾンのもつとも大切に基本の任務だ。

話題はずれるが、仮設庁舎の一件のほかにも、陸前高田市にとって大船渡市が頼れる隣組であることを表すエピソードがある。

12日の夜8時頃、大船渡市役所によれよれの男が一人やつてきた。陸前高田市の職員だった。

その職員は、発災時に気仙川南の気仙町にいたため津波被害を免れたものの、浸水とガレキの山で市役所に寄りつけなかった。とにかく岩手県庁に連絡しなければならぬと、内陸の水沢経由で大船渡市役所に来たのだ。

その職員は衛星携帯電話を借りて県庁に連絡、陸前高田市の被災状況を報告した。これが、陸前高田市が外部に情報発信した第一報になったという。

大船渡市は、発災後何も食わずガソリンも片道切符のこの職員に、おにぎりを分け与え帰りのガソリンも手配した。

有り難かった「国交省がついてるよ」のメッセージ

支援物資が届くと期待して待たされ続けた戸羽市長だが、〈ヤミ屋のオヤジ〉のメンタルな効果を指摘している。

「『俺たちがついてるよ』と国に見せていただけると、全然違うんですね。これからどうなっちゃうんだろうというときに、人として支えてくれるのが目に見えることはすごく有り難い。それに、常駐してくださいださってるリエゾンの方が、いろんなところをまわって情報収集してくれました」

東松島市の阿部秀保市長も同じ感想を持つ。

「『なんでも言ってくれ、なんでもやるから』というメッセージが嬉しかった。普通だと、こつちからお願いしたことしかしてもらえないけど、後ろで守ってくれている感じがしました」